

看護に内在する矛盾を考えるために

——看護者が生きる日常性・専門性・超越性——

守屋 治代

はじめに

1) 矮小化される生死

人が医療者の管理下に入らなければ、死ぬに死ねなくなったのはいつからなのだろうか。わが国では、医療者が胎児の時から死ぬまでの人の一生に関与し治療する壮大なシステムが出来上がっている。I. イリッチが『脱病院化社会』によって批判した1970年代と病院施設の状況は変化しているものの、「病院」という言葉を「医療システム」に変えれば、「医療システム化社会」と名づけることができる。人の生死は、この医療システム化社会のなかで新たに開発される医療技術の専門家によって分断化され、その傷をさらにケアする専門家が必要とされという具合に、医療システムは拡大の方向をたどっている¹。

こうした医療技術の発展・医療システムの壮大化が、医療専門職の専門性を推し進めた結果、人の生死が専門家によって矮小化される事態さえ出てきた。医療システムが人々の日常生活にあまりにも行き渡り過ぎているために、医療を受ける側も専門職側もその危険性に無自覚でさえある。しかもこの医療の発展は、人々や医療者自身が自覚していない「死を嫌悪するエネルギー」そのものによる²のだから、事態は深刻である。忌避されているのは「苦」や「喪」であり、究極的には「死」だといえる。

2) 看護の専門性に内在する矛盾

こうしたなかにあって看護ケアは、近代西洋医学によって分断されることの多い生の全体性を回復することを引き受けてきた。看護理論家 M. ロジャーズが“Unitary human beings”の看護科学論を提唱して以降、開発された数々の看護理論や看護論は、人間へのホリスティックなパラダイムに立っている。例えば、M. ニューマン、P. ベナー、J. ワトソンの看護理論が代表的である。看護学を体系化させ理論をもち、専門性を定位・確立しようとしてきた看護専門職は、現在一定の社会的評価を得るに至った。

ところが現在に至り、次のような指摘がされ始めた。患者の生の固有性・尊厳性・全体性を支える看護専門職者がその専門性を主張する故に、むしろ患者の生死を専門性のなかに囲い込んでしまう事態が起きているのではないか。あるいは、その専門性は限定性を前提としたものであり、人の生死の全体性を支えることには限界がある、というものである³。

¹例えば、移植医療、不妊治療とそれに伴う倫理的問題をあげることができる。新たな医療技術が開発されるたびに、人類はそれまでに直面したことのない新たな倫理的問題に直面し、自己決定を迫られ苦悩する人が出てくる。そしてそこを援助する専門家の必要性が言われる。権利や選択の自由が広がることは、人を本当に幸せにするのだろうかという疑問がわく。その上、今や医療は市場経済原理に呑みこまれてもいる。

²植島啓司、名越康文 2008 「対談 医療者に看取りは可能か?」『看護学雑誌』72巻7号 558～570頁

³三井さよ 2004 『ケアの社会学 臨床現場との対話』、勁草書房

三井はまず、T. パーソンの立場を紹介している。医療専門職は、その担う「実存的」性格の重大さと「不確実性」のために、患

例えば、看護を「生きられる世界の実践知としての配慮的行為」とした池川が、あくまでも他者の死である人間の死を、自分自身を含めた死としてかかわることができた契機は、看護婦としてではなく、一人の子どもとして父親の死に臨んだときだったという。父親の〈現存在〉としての存在のありよう（生きざま）を引き受けるという、今・ここで生きる〈現存在〉としての自覚が、その後の患者の死に際して、池川に〈現存在〉が私自身に迫っている死への態度としての関わりをもたらしたという¹。その上で池川は、看護倫理の本来的機能は、今日の高度科学医療の現場において、患者や家族にとって、何がよりよく生きるための正しい判断であり、何がなされなければならないかを検討する責任・判断・行為であると述べる²。

池川は、「看護婦としてではなく」と言いながら、なおかつ看護者としての専門性に言及する。人の生死には、看護者の専門性によっては超えられない次元があるにもかかわらず、他者にとってよりよき判断をするという、看護に本来内在している矛盾がここにある。

3) 問いとアプローチ

本来、人の生死の営みは医療や看護の専門性を超えたところにあり、その専門性によって全面解決しようとする姿勢そのものが問い直される必要がある。なぜなら、看護の専門性は次のような「自己矛盾」を抱え込んでいるからである。(1) 全てを問題とみなして取り込み解決しようとする看護の専門性は、それ故に「生死の医療化」への暴走化を招きかねない。(2) 病にある他者の日々の生きにくさをケアしようとする際に生じる職務日常性は、それ故に患者が体験している病苦のもつ非日常性・一回性と乖離しやすい。

看護の専門性をもつこのような矛盾は容易に解消されるものではなく、一人ひとりの看護者自身によって矛盾として自覚され³、一人ひとりの看護者によって生きられるべきものだと思われる。このような矛盾を生きるとはどのようなことをいうのか。看護の専門性を問い直して相対化し、看護がその意味を失う地点から、にもかかわらず人の生死において看護が必要なのだとしたら、いったい看護とはどのような営みでありえるのか。この問いは、次のように言い換えることができる。看護者はどのようにして、日常性・専門性・超越性を同時に生きるのか、しかも看護者の日常性・専門性・超越性は、他者への現実の関わりをなかで、どのように具現化されるのか。

この問いへは、次のような構想をもってアプローチしてみる。

(1) 小林の言葉を借りて先取りしていえば、看護者は「専門職ならざる専門職」であることによって「真の専門職」となる⁴、という事態を探ることになる。そのために、ブーバーの〈我ー汝〉〈我ーそれ〉関係の「二重性」の思想から出発し、上田の「二重世界内存在」、エックハルトの非神秘

者の全てに関わるのではなく、彼らの needs に限定して働きかければよいというものである。これに対して、E. フリードソンは患者の他者論の立場から、パーソンズの言う専門職は他者に対して開かれていないために、患者の生の固有性には応えられないことを批判している。三井は、不確実性を有する職務には限定性は不可欠であり、限定性の乗り越えこそ検討されなければならないと言っている。次に、限定性を乗り越えるために考えられてきた2つの方向性とその限界を指摘する。ケア技法論とケア倫理論である。技法を拡大・多様化すれば患者の生の固有性に応えられるという方向性をもつケア技法論は、フリードソンの他者論からの指摘に充分答えられていない。一方、「専心」や「歓待」で捉えられるような「無」限定性によってこそ、患者の生の固有性に関わることが可能になるというケア倫理論は、過剰な倫理的期待へと転化する危険性を指摘している。

¹池川清子 1991 『看護——生きられる世界の実践知（フロネーシス）』、ゆみる出版

²池川清子 2005 「第4章 実践知としてのケアの倫理」、川本隆史編『ケアの社会倫理学——医療・看護・介護・教育をつなぐ』、有斐閣

³自覚ということについてさらに吟味が必要である。さしあたって自分の人間的水準での反省というより、自己がより高次からの光によって返照されることによる内面の深まりを意味するが、ここではこれ以上立ち入らない。

⁴小林恭 2006 「ナイチンゲールの積極的神秘主義と看護論における「三重の関心」——ケアの人間学の原点のために——」、上田閑照監修『人間であること』、燈影社

主義の解釈を通して、日常を生きながらそこに超越性が現れるという在り方を学ぶ。

(2) その思想を地盤に、近代において初めて日常性のなかから看護の原基的なものを明らかにしたF. ナイチンゲール看護論及びJ. ワトソン看護論を再解釈し直す。小林はナイチンゲール看護論について、看護という日常性と科学と宗教性の根源的一体性を切り開く先進性をもつと評価する¹。ここで小林が指摘する日常性、科学性、宗教性という言葉は、拙論の問いとするそれぞれ日常性、専門性、超越性に言い換えられる。また、J. ワトソンは、ポストモダンとそれを超えようとする看護の観点からのナイチンゲール看護論の再構築を試みている²。

(3) 最終的には、「専門職ならざる専門職」であることによって生まれる「真の専門職」が、現実的存在的位相に姿を現す結節点となる「祈りとしてのケアのわざ (art)」に論点を焦点化させていく。この時点で、看護のわざは看護の「道」における「行」として理解する以外になくなる³。しかし、このような看護のわざは、もはや近代教育システムのなかで伝授できるものではないように思われる。

拙論は、以上のうちおよそ(1)に相当する。ブーバーの「二重性」の思想、上田の「二重世界内存在」の思想、上田によるエックハルトの「マリアとマルタ」の説教解釈について述べる。これを足掛かりに、看護に内在する矛盾を考えるために、二重性の思想からの光を看護実践にあててみたいと思う。

1. ブーバーの「二重性」

1) <我—汝>と<我—それ>

まず、筆者が看護における二重性を考える契機となった、吉田の『ブーバー対話論とホリスティック教育』⁴に基づいて述べる。「二重性」の思想は、ブーバーにおいて明確である。吉田は、ブーバーが晩年に自らの思想的営為を回想し、根源語<我—汝>と根源語<我—それ>の二重性は全ての存在者と共存する人間の生の根本事情であるにもかかわらず、このことにはほとんど注意が払われていなかったこと、この二重性を生きることは、人間の生の「高貴な悲劇」だと述べていることを指摘する(80頁)。この2つの関係性は、ブーバーの「人間は<それ>なくしては生きることができず、しかし<それ>のみでも生きるものではない」という言葉が示しているように、両者の適切な関係を模索し続ける他はない(88頁)。<我—汝>関係は、時に容易に<我—それ>関係に変質し、人間はこの二重の在り方を往還しながら生きる存在である。

2) ブーバーにおける超越性

ブーバーは、聖なるものとの関係を、その独特な「永遠の汝」という超越性によって語る。ブーバーにおいては、一人ひとりの「汝」の向こうに、「永遠の汝」が感得されている。「我」は、一人ひとりの「汝」を通して「永遠の汝」に語りかけているのであり、また「永遠の汝」は、一人ひとりの「汝」を通して、「我」に呼びかけてくる。<我—汝>関係は、「永遠の汝」に支えられている。吉田は、このような「汝」への呼びかけと応答のなかに、ブーバー独特の対話の深みにおいてこそ

¹小林恭 2006 「ナイチンゲールの積極的神秘主義と看護論における「三重の関心」——ケアの人間学の原点のために——」、上田閑照監修『人間であること』、燈影社

²F. ナイチンゲールの超越性とJ. ワトソンのそれとの質的な吟味はこれからである。

³西谷啓治 上田閑照編 2001 「行ということ」『宗教と非宗教の間』、111頁、岩波書店。次の文章を参照。仕事が修行とされる時、事=行の「まこと」と人格統一の「まこと」とが一つの「まこと」として求められた。技術を習い覚える際に「身を入れ」「念を入れる」こと、仕事のうちへ自己を投げ入れることであり、全人的に打ち込むことであり、それによって技術の習得と人間の形成とが同時的に一つに成就されることである。

⁴吉田教彦 2007 『ブーバー対話論とホリスティック教育』、勁草書房

触れられる聖なる次元を看取する。ブーバーの「聖なるもの」は、たえず目の前の水平的な他者への対話において顕現する。

4) ブーバーにおける神秘性から日常性への帰還

前述したようにブーバーにとって「聖なるもの」は、今ここの足下の「日常性」の只中に生じる。目の前に現前する一人ひとりの人と向き合う日常のなかに、聖なる神秘も含んだ一切がある。と、吉田はブーバーの宗教性を、神秘主義の忘我没入的一体感ではなく、「応答的主体性」を失わない存在の全体をかけた能動性のなかにみる。

この前述の2つの宗教的体験は、前者である「恍惚とした神と自己との合一／大我への忘我的没入」と後者である「専心没頭による力の集中／全身全霊を傾ける精神全体の統一」とに区別される(122頁)。吉田は、ブーバーが前者の忘我的陶醉体験の後「転向」し、「日常性」に帰還したことを指摘し、この両者の混同への注意を喚起する(120頁)。ここで筆者としては、ブーバーが日常性や目の前の他者のなかに帰還する以前に既に、「聖なるもの」「永遠の汝」なるものを感じ得ていたことを確認しておきたいと思う。その目が日常性や目の前の他者をみた時、もはや単なるそれではない。背後に「永遠の汝」が限りなく重なっているそれである。

こうしてブーバーにみる「日常性」のなかに「聖なるもの」が顕現する様相を、吉田は次のように語る。「今ここ、目の前にいるあなたに向けて、その都度新たに生成してくる現実性のなかに身を投げ入れる。その全存在を賭けた主体性が極まるとき、その極みで能動性が反転して、自己を捧げる絶対的な受動性に転化する。その一瞬に、あなたに呼びかけている私は、呼びかけ返される。その瞬間、すでにそれは、この私のわぎを超えている。もはや私が呼びかけているというよりも、呼びかける声が、私を通して、あなたに届く。(131～132頁)」

なお、ここでいわれている「主体性が極まるとき、その極みで能動性が反転して絶対的な受動性に転化し、この瞬間私のわぎを超える」という事態について、さらに検討が必要であり後述する。ここではさしあたり、能動性を「みずから」に、「受動性」を「おのずから」に言い換えることで、あらたな課題がみえてくると思われる¹。ここでは課題提起にとどめ後述する。

5) 看護ケアにみる<我-汝>関係と超越性

ここまで、吉田をとおしてブーバーによる人間存在のもつ<我-汝>関係と<我-それ>関係の二重性と、汝の背後に「永遠の汝」をみるという、汝の限りない厚み(奥行き)を確認した。また、日常性のなかで、応答的能動性が徹底されたとき、あるいはそれが徹底して自覚されたとき、能動性は受動性に転化し、そこに人のわぎを超えた聖なるものが顕現する、という神秘性を教示された。ブーバーにとって、神秘性は日常性と相即するものであった。

こうしてみてきた「日常性」や目の前の他者は、看護ケア実践においても現れる。「その時その場所で語られるべく形をあらわした一度かぎりの言葉を贈り、…その人の存在を、現にそこに生成しつつあるその人の生命を、確かめ証す(確証する)」ような「現在化(現前化)する対話」(127～128頁)は、看護者が看護する相手と出会っている場においても生成する。看護者は関わりのなかで、目の前のその人のなかからはたらき出ようとしている生命を確かに感受することが少なくない。看護者は病むことを引き受けてそこにいる人の姿そのものから、それだけではない何か、そうして生きていく人間の尊厳を感じ得ている。弱さや障がいとともにある偉大さ、神聖さを「確かめ証(確証する)」しているのだといえる。

¹竹内整一 2004 『「おのずから」と「みずから」——日本思想の基層』春秋社。竹内が世阿弥の言い方を前提に次のようにしている事柄は、吉田のことばと重なる。「おのおの」の「みずから」が「みずから」のある徹底した営みにおいて「おのずから」を発見・感得しえたときに、「みずから」のままに「成就」する…。「おのずから」に突き抜け、ふれることにおいてこそ、「みずから」の存在、働きが結像・発現し、その価値なり意味なり荘厳なりが与えられてくる。(226頁)

こうして看護者が自分の身をそこにおき自分を開いてその人に向かうという主体性・能動性においては、看護者である我は、相手である汝に呑みこまれてしまうことはなく、我と汝の関係を生成していく。この二人の関係は、「永遠の汝」によって支えられている。あるいは、看護者の内部でもなく、患者の内部でもなく、吉田のいう『間の場』あるいは両者の『間』にはたらく<世界>の形成力」(234～236 頁)によって支えられている、ということができる。このような超越性が看護ケアの場にはたらいている。それにより看護者は、多事多難な日常に踏みとどまることができる。

6) ブーバーによって示唆される看護者が生きる二重性

このようにブーバー対話論の観点からの光によって、看護ケア実践現場の日常を照らした時、次のようなことが浮き彫りになってくる。現在の医療現場において前述の<我-汝>関係を生き残らせるためには、医療や看護の技術化・システム化によって増強していく<我-それ>関係と、目の前の患者との<我-汝>関係を峻別し、かつ両者の対極性が生みだす葛藤を引き受ける必要がある。看護者はまさにブーバーが言う「高貴な悲劇」である二重性を往還しながら、看護者として生きるという在り方がみいだされる。看護者が生きる二重性とは、<我-汝>関係と<我-それ>関係を生きる二重性を引き受けることであり、看護ケア実践の現実的日常とそこにはたらく見えない超越性の二重性を感得することである。

2. 上田の二重性

1) 「二重世界内存在」

次に上田による「二重性」をみてみたい。ブーバーにあっては、「我-汝」の根源的事態の背後に「永遠の汝」という超越的人格者があらわれてくるのに対し、上田は、世界そのものに「世界/限りない開け(虚空)」の二重構造を、そこに「於いてある」自己に「自己/自己ならざる自己」の二重性をみる¹。この二重性は、二重性としては「見えない二重性」である。以下は、上田の『経験の場所-見えない二重性』²に基づいて述べる。この二重性を世界に存在する主体のあり方としてみると、「世界/限りない開け(虚空)」という見えない二重性が、人の真に生きている「場所」ということになる。つまり、真の人は、世界に於いて自己としてありつつ同時に、「自己ならざる自己」として虚空に於いてある。生はこの二重の水準において生きられることになる。

ところが、「自己ならざる自己」というのはそれ自身動揺不安的なあり方である。そのため、「本当の自己でない自己」と「自己なしによって本当の自己である自己」との転々たる両義性に動揺し、そのなかでそのつど自己性の統合が求められる。この統合とは、自己を得んとして自己を失うか、自己を捨てて自己であるかという逆説的な現成のしかたをする(187 頁)。このようにいわれる自己は、静的で平面的な構造や実体としてではなく、「自己の否定」という否定作業によって全く違う次元の間を動的に変容し続ける運動として受け取ることができる。

さらに、先に述べた世界の「見えない二重性」が、「見える二重性」として顕現する事態がある。世界と「限りない開け」が生きられる時、彼方のリアリティが感得される。これは、あくまで主体が「自己ならざる自己」として見えない二重性に「於いてある」こと、死して生きる主体であることと連動して起こることであり、ここにすべての核心がある(192 頁)。逆に、主体が「限りなきもの」に開かれていないまま、見えない二重性が見えるようになった二重性は危険である(193 頁)。

2) 二重性を生きる困難

前述したような二重性をめぐる危険について、看護ケア実践に即して考えてみたい。ここでいう危険とは、主体が「限りなきもの」に開かれぬまま、スピリチュアルケアを実践しようとする際

¹ブーバーと上田の「二重性」の異同について興味深いのが、拙論の目的を超え、また筆者の力量を超えるので、ここでは立ち入らない。

²上田閑照 2007 「経験の場所-見えない二重性」、『哲学コレクションII 経験と場所』、岩波書店

の陥穽である。看護者が「限りなきもの」に開かれた「自己ならざる自己」としてではなく、専門家としての自己や人としての自己に閉じたまま、相手のスピリチュアルな次元に向かってケアをしていると勘違いしていることがないであろうか。「ケアする側が、まず、スピリチュアルになる」と西平がいう¹のはこのことであろう。

また、人の真のあり方が「自己ならざる自己」をみだしこの世を生きることであった場合、病や困難は、自己が否定され「限りなきもの」に開かれる契機とさえなり得る。上田がいう「生命一生（生活／人生）－いのち」の全連関が生きられるということは、「生」の位相から「いのち」の位相への飛躍において、一旦「生」への否定が遂げられることを指す²。ここでも、病を生きる人へのスピリチュアルケアは安易なものではないことがわかる。看護者はこの否定を受けとめなければならない。喪失や死を病者とともに引き受ける覚悟が求められる。

日本のターミナルケアを切り拓いた尊敬する故シスター寺本が「死の形相がいかようであっても、この人が自分の与えられた死を、苦しみのなかで生き抜き、最期のいわゆる臨終の苦しみの中を、少しずつ死に近づいていくその姿に、たとえようのない尊厳とすばらしさを見る」³という言葉を残している。死へのプロセスを否定することなく受け取り寄り添い続ける寺本の姿に、「限りなきもの」に開かれた「自己ならざる自己」として生きた修道女であり看護者の境地をみるができるように思う。

ここでは最後に、見えない二重性が見えるようになった二重性の危険について、看護ケア実践でのヒーリングケア現象をとりあげる。ヒーリング現象のなかに、見える二重性の顕現をみてとる陥穽が潜んでいる。「見えないところまで見たとして、そのように見えたとするところに滞る危険性」⁴である。例えば、永遠の哲学や神秘思想の影響を受けたJ. ワトソンは、その看護論において、「トランスパーソナルな・ケアリング・ヒーリング」実践を提起し、「心と身体と霊性の一元的性」にふれている⁵。「聖なるもの」をイメージやメタファーによって、見える二重性の顕現として語っている。これには実践者の二重性のあり方、伝えられる言葉の問題、受け取る側のあり方について、慎重なアプローチが必要と思うがここでは課題提起にとどめる。

3) わざ（業・技）⁶の非聖化過程：

世界と自己の二重性は本質的に不安定であることを述べた。二重性を往還する運動を止め一重性に固く閉じられたまま世界と自己が増強し続けた時、つまり人が二重の水準を生きなくなった時、人のわざはどのように変質するだろうか。上田が、エリアーデの「非聖化過程」を参考に農耕儀礼を例にあげて次のように述べている⁷。

変質の決定的な機微は、宗教的生としての農耕儀礼が聖なる次元とのつながりを農耕の成果のために再演することへの変化にある。第一の水準（成果を目指す）における技術が進むにつれて、技術との結びつきにおける成果への関心が次第に強く全関連を導くことになり、二重の水準の間が不安定なままに儀礼としての農耕から一種の技術としての農耕儀礼へと一方的に変質してゆく。やがて技術の進歩が迷信からの解放と結びついて飛躍的に進む。これによって「もう一つの次元」が人間的準に塗りこめられて閉ざされてゆく。迷信は二重の水準がなす深みへの歪み（それを通して深

¹西平直 2009 「スピリチュアルケアと我執性」、日本ホリスティック教育協会 吉田教彦・守屋治代・平野『ホリスティック・ケアー 新たなつながりの中の看護・福祉・教育』、せせらぎ出版

²上田閑照 2007 「宗教とは何か」5 節 人間として生きること、『哲学コレクションⅠ 宗教』、岩波書店

³寺本松野 2001 『看護は祈り 寺本松野 ことば集』4 頁、日本看護協会出版会

⁴上田閑照 2007 「経験の場所－見えない二重性」193 頁、『哲学コレクションⅡ 経験と場所』、岩波書店

⁵ジーン・ワトソン／川野雅資・長谷川浩訳 2005 『ワトソン21世紀の看護論 ポストモダン看護とポストモダンを超えて』、日本看護協会出版会

⁶ここでは、「業」と「技」両者の意味を含んでいいと考えるが、まだ検討課題である。

⁷上田閑照 1992 『場所 二重世界内存在』190～195 頁、弘文堂

みも歪んで見える)であるが、近代的自由は歪みを直そうとして深みそのものを閉ざす仕方を取る。しかも深みを閉ざすことによってますます技術的滑走が容易になる。

ここに、宗教者による神への祈りとともにあった看護のわざが、近代科学の枠組みのなかで近代的自我主体の看護者実践者によって、単なる「理論や法則の現象への適用」としての技術に変質していった経緯を重ねることができる。現在の看護技術論では、現象学的アプローチによる技の身体化、身体化された技までは語られるようになったが、これはまだ上田のいう第一の水準(人間的水準)までの技術論に相当しよう。一方「二重世界内存在」としての看護者の技は、人としてのわざでありながら聖なるわざでもある。このような看護のわざの深みについては、さらに吟味が必要である。

3. 上田によるエックハルトの「マリアとマルタ」の説教解釈

以上までに、上田による「二重世界内存在」という命題と、それに連動して捉えられる人の生やわざ(業・技)の深みをみてきた。見えない二重性が生きられる時、それは見える二重性に受肉する。専門家でありながら、専門家としては一度否定されなくてはならない。私の技(はからい)は、いったん私の技ではなくならなければならない。そうして、「神のわざ」として蘇る。

次に、このような看護の営みを「行」として考えるために、日常性と超越性が交差する事態を「事を行うこと」のなかにみていきたいと思う。ここであらためて、前述で課題提起にとどめた吉田による「能動性が極まり絶対的受動性に転化する」という動態が検討される。

1) 非神秘主義——エックハルトによる「マリアとマルタ」の説教

上田は、マイスター・エックハルトが聖書の「マリアとマルタ」の話(ルカ伝10章38~42節)を義解し、マルタの方に究極性をみている説教をとりあげている¹。まず以下に、上田による紹介を示す。

イエスの足下に座って御言に聞き入っているマリアに対し、接待のために忙しく心労するマルタの方に、エックハルトは真の完全性をみている。マリアの在り方が神への言い表し難い憧れ、永遠の御言による慰めと法悦であるのに対し、マルタの在り方は、「現世界での経歴としての円熟せる年齢」、「徹底的に修練された根柢」、「愛の命ずる究極に向かって外的働きを正しく整えつつ遂行する心得」にある。マルタは、マリアが法悦に溺れる危険を見てとってたしなめ、立ちあがって「神から離れ去ること」をマリアのために求めた。マルタにおいては「一」なる神との一はずでに到達されており、その上で初めて「多」事に思い煩い心労する在り方に出ることができたのだ、しかもさまざまの事物のもとに立って心労するが、思い煩いとらわれてはいるのではない。キリストはこのように、マルタの立場の完全性を証している。すなわちこの完全性とは、「永遠の浄福の完全性」と「時間のうちにおける働きの完全性」という二重の完全性だという。上田は、ここに時間性と永遠性とが仕事のうちで一つになっている姿をみている。

上田はマルタの在り方を、神性の無に徹すること「と一つに」現世界の実生活に帰還した立場と解釈する。神が根柢の無に還ったその神性の無が(神ではなく)マルタのうちに、マルタとして現身化している、人間となっている。そのようにマルタは台所で働いている。

以上、このような日常の多事多難のうちに労苦することのなかに、超越への道が相即的にある。他者に配慮(ケア)し他事へと能動的に動き出ているマルタは、ブーバーがいうところの「専心没頭による力の集中/全身全霊を傾ける精神全体の統一」の態勢である。自ら進んで他者や事に向かい、我への執着を離れ、神への執着からも離れている。この日常の只中であって無心である態勢に、

¹上田閑照 2001「非宗教の宗教」『上田閑照集 第7巻』同 2002「エックハルトと禅」『上田閑照集 第8巻』、岩波書店。上田によるエックハルト研究のうちで、「マリアとマルタ」の説教をとりあげたのは、小林恭先生にご教示いただいた折、マルタの働く姿を看護者としての行として受け取り直すことができるのではないかと、という示唆を得たことによる。

エックハルトは真の完全性をみた。

2) 時間性と永遠性を一つにする仕事

前述で、マルタに見出された「円熟せる年齢と徹底的に修練された根柢」、「愛の命ずる究極に向かつて外的働きを正しくととのえつつ遂行する智慧の心得」の境地とは、現世界においてはどのような事として受け取ればいだろうか。これについてエックハルトが、時間性と永遠性を一つにするような仕事には、秩序と洞察（思慮）と智の3つの肝要な性格が必要だということを、上田は次のように説明する。秩序とは、事の緩急軽重を究極に向かつて秩序づけつつ、そのつどの緊急事に応じていくこと。洞察（思慮）とは、その時としてはそれ以上は考えられないような最善事を「理性的に洞察して」遂行すること。智とは、その仕事のうちに生きた真理が現前することを感知しその真理の現前を味わうこと¹。

現世界の日常とは、「時間」と「多事」によって成り立ち、そこに人は身体として働き出ているというのが日常のあり方である。上田がいう上記の3つの内容は、人間が生きる現実の具体性、身体性に徹底していながら、同時に実存的、超越的でもある。智慧に満ちた経験と修練された身体、至誠において他者の利他に向け働き出ること、自分の働きとその場を適切に整えること。こうした姿を、看護者であれば、ナイチンゲールの教えに重ねることができるだろう。ナイチンゲールは、西洋神秘主義や東洋の宗教伝統の影響を受けていることからしても²、マルタの仕事とナイチンゲールの看護が重なっても不思議なことではないと思われる。

このことから、看護という営みの根源性、超越性を検討するには、ナイチンゲール看護の宗教性を脱魂して科学性のみを抽出するのでは不十分だということがわかる。ナイチンゲールの言葉をあげてみよう³。「われわれの身体 (bodies) と神 (God) がそれを置かれたこの世界との関係について理解すること」、「自然 (Nature) の働きであり、生命 (life) の法則が患者に働きかける最も良い状態に患者を置くこと」、「…すべてを、生命力の消耗を最小にするようそのように整えること」、「良い看護というものは、…一人ひとりの病人に固有のこまごましたことを観察すること」。

これらの言葉から、ナイチンゲールの世界観には、人／人が置かれている世界／さらにその世界に働きかける自然 (Nature) あるいは神の次元の重層性を読みとることができる。そのうえで看護とは、大いなる自然 (Nature) が働きかけてくる一人ひとりの場を整えることが看護の営みである。これらには、冒頭で小林が指摘するように、超越性と科学性と日常性を一つにした内容が伺われる。

3) 能動性から受動性への転化

ところで、神との合一への方向を向上とすれば、神から離れ現世界に帰還する方向を向下と呼べる。上田によれば、神との合一においては最後の我性がなお残るが、さらに神から離れたところにおいては我性からもとらわれない。そのような魂は、そのまま身体になり身体的に働く⁴。この時の身体は「身」⁵と呼んでもいいと思われるが、この身の動きは「みずから」というよりは、「おのずから」と表現するのがふさわしいだろう。

¹ 上田閑照 2001「非宗教の宗教」『上田閑照集 第7巻』、334～335頁、岩波書店。

² フローレンス・ナイチンゲール、M.D.カラブリア編／小林章夫監訳『真理の探究』、10～13、36～37頁、うぶすな書院。ナイチンゲールはプラトン研究を通じて、キリスト教神秘主義に深い関心を寄せるようになった。ナイチンゲールの宗教哲学に多大な影響を与えたブンゼン（外交官であり学者）は、エックハルトも研究していた。ナイチンゲールは一方で、「神秘主義を健全に発展させるために、イスラム教、仏教、東洋思想、イスラム神秘主義、汎神論などにもあたってみなければならぬ」とも主張していたとされる。

³ フローレンス・ナイチンゲール／湯嶺ます、薄井坦子、小玉香津子ほか2名訳『看護覚え書 改訳第6版』。

⁴ 上田閑照 2002「エックハルトと禅」『上田閑照集 第8巻』、124頁、岩波書店。

⁵ ここでいう「身」とは、門脇がいう道元や聖書における「智慧に満ちた全身」論を参考にしている。門脇佳吉 1994『身の形而上学』岩波書店。

ここで、吉田がいう「能動性が極まり絶対的受動性に転化する」という動態を解釈してみたい。能動性の極みとは、意図性をもって主体的に自己を投入して事に取り組んでいることである。一方、絶対的受動性とは、「～のために」という意図さえ消え、無心に事の本質の只中において事になりきっている状態である。この状態では、事の成就の流れに乗っているため、事の本質が直接に感応され自分の成すべきことが自動的に決まってくる。自動的ということは、意図的選択の余地もない程に迷いもなく何の障碍もない真の自由の境地で身が動くということである¹。向こうから事の本質²が姿を現し、成すべきことが示され道が拓かれる。全き意図性（はからい）は、気がつくとき全き無意図性（我なし）にとって変わっている。能動性の極みは絶対受動性に転化すると、こういう事態をいうのだろう。

このことに改めて、先の竹内の言葉を重ねてみたい。「おのおの」の「みずから」が「みずから」のある徹底した営みにおいて「おのずから」を発見・感得しえたときに、「みずから」のままに「成就」する…。「おのずから」に突き抜け、ふれることにおいてこそ、「みずから」の存在、働きの結像・発現し、その価値なり意味なり荘厳なりが与えられてくる³。

ここでいわれていることには3つの契機がある。1. 「みずから」を徹底すること、2. その営みのなかで「おのずから」が感得されること、3. それによって「みずから」のままに「成就」すること。つまり、この営みは、最初から「おのずから」を得ようとしているのではない。また、「みずから」を超えたところに「おのずから」はそこに確かにある。最後に、「みずから」が「おのずから」になり「おのずから」が消失するのではない。「おのずから」にふれることが「みずから」のままに「成就」させる。ここに不思議があるように思う。また筆者の看護者としての立場から言えば、自己の応答的主体性を最後まで失うことなく、同時に自己を超えた限りなきものに開かれているという二重性を考えるうえで、注目するところである。

4. 「無窮の動性」を生きるということ

そこで、この能動性（みずから）と受動性（おのずから）の二極性の現れに時間的順序をみるのではなく、同時的な事態としてみるとはどういうことかを検討してみる。能動性から受動性への「転化」。「みずから」のままに「成就」するという事態。これを、西平の『世阿弥の稽古哲学』⁴の次のことばに基づいて、「交叉反転」の矛盾と捉えてみる。

「成就」は際（きわ）において生じる。転換するその一刹那、対立が「和する（交叉反転する）」その微妙な瞬間においてのみ生じる。対立している状態ではない。しかし調和してしまった安定状態でもない。今まさに対立が交叉反転するそのギリギリの「堺」。…動的緊張の中に真理が現れる。矛盾し反転し、また反転する出来事の、その「堺（際・一瞬・裂け目）」においてのみ真理が姿を現わす（166～167頁）。

これは、ブーバーが「狭き尾根道」といって「堺（際）」を暗示して吉田が能動性から絶対的受動性への転化の「動態」といったように、二極のどちらかに停滞しない限りなき動きそのものを指している。ここに至って、R. オッターがエックハルトと禅に共通してみたものというところの「停

¹ ここでいう「真の自由」という考え方は、小林恭先生からご教示を受けた際に、「被決定の自由」は恩寵の自由であることを知ったことに依る。永遠の今・絶対の今に立てば、やるべきことは常にただ一つであり、迷いもなく成すべきことにピッタリと応じていくことができる。これこそがレベルの高い自由だと理解した。

² ここで繰り返し使ってきた「本質」とは、「…の意識」という志向性をもつ表層意識が捉える事物の概念としての本質ではない。井筒を参考にし、深層意識領域が捉える一切万有を生成化育するところの存在深層にひそむ「本質」を想定している。井筒俊彦 2001『意識と本質』、255頁、岩波書店。

³ 竹内整一 2004『「おのずから」と「みずから」——日本思想の基層』春秋社。

⁴ 西平直 2009『世阿弥の稽古哲学』、東京大学出版会。

まることのない無窮の動性」¹ということばが近づいてきたように思う。

ここまでの検討を経て、看護者にとっての日常性と超越性、時間性と永遠性、能動性と受動性は、日常性のなかの超越性、時間性のなかの永遠性、能動性のなかの受動性として受けとめ直される²。この対概念である二極の前者をA、後者をBとする。「AのなかのB」は、Aは人間的水準の位相であり、Bはそれを超えた位相におけるものである。人が限りない無限に開かれていたときに、人のAのなかにBが顕現する可能性が拓かれる。人間的水準において見えるものや具体的な行動としてはAであるが、そこにみえない二重性が感得されてくる。このとき、AはAのままBとの二重性に於いて全きものとなる。しかし、無限への限りない開けは容易に閉じられてしまう。閉じていることにさえ気づかないかもしれない。また超越的な体験のままAの位相を見失う可能性もある。問題は、この世にあって生身の相手と関わる生身の看護者として、二重性を二重性のまま保ち続けることの困難さだ。

看護は、人の生命に自然 (Nature) が最も働きかけることができるよう、その生命の場である日常生活の具体的な小さなことを整える営みであるので、この二重性を失った時、看護実践は日常の惰性に容易に落ちる。マルタの在り方のなかに看護者の真の姿を探そうとすると、当然のことながら神から離れたマルタの外的働きだけに目を向けようとしているのではない。先にブーバーにおいて、日常性や目の前の他者のなかに帰還する以前に既に、「聖なるもの」「永遠の汝」なるものを感得していたことを指摘した。同じように、「マルタの在り方の現成はマリアの在り方を通して」³である。以下に上田を引用する。キリストは消えなければならない。…キリストが消えたその空間は、キリストが消えたことによって、靈性を帯びてくる。…キリストなしに歩むとは、…独りで、ということは靈性空間のなかを、自らは無であることによって靈性に浸透されて、他者や自然と靈性において交流しつつ、歩むということである。但し、キリストが消えるためには、先ず、キリストのなかに我々が、我々のなかにキリストが、という合一の経験がなければならない⁴。

また、ナイチンゲールの言葉(『看護覚え書』)を受け取り解釈する際にも二重性をもたない目は、日常生活のこまごまとした無味乾燥な事柄の羅列とみるか、ナイチンゲールの現実的合理性に注目して理論や法則性を抽出することになる。

しかし、このことの真の理解への到達は「理」としての静的な方法によってではなく、ブーバーが生涯を通じた対話のなかで、マルタがキリストから離れて働くなかで、世阿弥が稽古し舞うなかで、というように「行ずる」ということが問題となってくるように思われる。そこで「身」による理解という位相が開かれてくるだろうが、ここではこれ以上立ち入らず検討課題とする。

おわりに—二重性を帯びた看護者論へ

以上、ブーバーの「二重性」の思想、上田の「二重世界内存在」の思想、上田によるエックハルトの「マリアとマルタ」の説教解釈を通して、看護者が日常性・専門性・超越性を生きるということを考えるための地盤となるものを模索してきた。「二重性」とは静的な重なりをいうのではなく、「停まることのない無窮の動性」と理解される。また具体的には、マルタの在り方のなかに、日常性のなかの見えない超越性を確認し、そこに看護者の真の姿を探しナイチンゲールの言葉を深めていく可能性を見出そうとした。

拙論は、冒頭で示した小林がいう「専門職ならざる専門職」であることによって生まれる「真の

¹ 上田閑照 2008『哲学コレクションV 道程—思索の風景』166頁、岩波書店。

² 看護者はあくまでもこの世において病者に応答しながら共にあるという立場を意識し、さしあたりここでは、「超越性のなかの日常性」「永遠性のなかの時間性」「絶対受動性のなかの能動性」というベクトルは取り上げないこととした。

³ 上田閑照 2008『哲学コレクションV 道程—思索の風景』167頁、岩波書店。

⁴ 同上、184頁。

専門職」という、逆説的な問いから始まった。看護の専門性のもつ地平が、よりその外側に限りなく開かれた地平のなかにおかれたとき、限定された専門性が専門性として確保される。外側に開かれた限りない地平に出たときその専門性は一旦否定され、再び専門性に戻ったときその看護者は二重性を帯びる。拙論は、二重性を帯びた看護者論¹への素描であり、随所に検討課題を残している。

現代社会の人の生死は、「それ」化され手段化されて一重に閉塞し、「いのち」が枯渇している。医療システム化された医療現場において、「いのちの蘇り」を見届けること、そこに居合わせる事ができたらと願っている。

(京都大学 GCOE<心が活きる教育のための国際的拠点>2009 年度研究開発コロキウム論文集 人間形成における「超越性」の問題—自己変容・ケア・関係性—、p. 57～73 所収)

¹看護者における二重性の在り方についてこのように考えてきたとき、当初筆者は「相即の看護」という言葉を使おうと考えた。しかし、「相即」は意図して目ざすものではなく行ずることのなかでおのずから成就されるものだとなれば、「相即を目ざす看護」となりかねないと考え使わないことにした。既に、「おのずから」を求めれば求める程「おのずから」は遠ざかり、「みずから」を徹底したときに、「おのずから」への反転が起るのだと書いた。しかし、実際気がつく、「おのずから」を得ることを手段化して「みずから」の働きに出ていることはあると思う。